

「安政遠足・侍マラソン」

日本で最古のマラソン

淡路博和

群馬県安中市では、毎年五月の第二日曜日には、恒例の「安政遠足・侍マラソン」が盛大に挙行されています。「遠足」は「とおあし」と読み、その由来については後述しますが、今年も五月九日（日）の午前八時、安中市長の敲く太鼓の六つ目の音を合図に、二千人程のランナーが一斉に安中城址からスタートしました。

町内を走るランナーたち



城の町口門を通過すると旧中山道に出ます。そして西へ西へとゴールを目指して走ります。

ゴールは二つあって、一つは上信国境の碓氷峠、そこに鎮座まします熊野神社までの約二十九・一七km。もう一つのゴールは横川の関所跡を経て旧坂本宿西端までの約二十・三五kmです。スタートから峠下までの沿道には多数の市民が間断なく並び、手旗を振って声援を送ります。中には屋台に水やジュース・果物を並べてサービスするボランティアの女性たちもいます。

「一声一〇〇歩」といって、「ガンバッター」の一声で一〇〇歩は走れるそうです。「疲れたが碓氷峠の新緑が素晴らしかった」。これが皆さんの感想です。

ランナーにはランニング姿で記録を競う人もいれば、侍やアニメの主人公などに仮装した人たちもいます。むしろ仮装の人たちのほうが多いのが、この「遠足」の個性になっています。

ところで、この「遠足」が復活して今年で三六回目を迎えましたが、実はこの「遠足」には、れっきとした歴史的由来があるのです。

江戸時代の末期、安政二年（二八五五）、時の安中藩主板倉勝明侯が家臣たちに命じて、安中城内から碓氷峠の熊野権現まで、中山道を走らせたのです。そのことが一つの古文書の発見によって判明したのです。

昭和三十年五月のこと、郷土史家の本多夏彦（高崎）・佐藤勲（松井田）両氏が、碓氷峠熊野神社の社家曾根あき氏（茶屋東屋）所蔵の古文書の中から、左のような横長帳を発見いたしました。



右の表紙には左のように記してあります。

安政二卯年五月十九日ヨリ
安中御城内御諸士御遠足着帳
碓氷峠神主組頭

安中城の諸士（安中藩の侍たち）が「遠足」を行い、その着順が記されていたのです。冒頭から日附・着時刻・諸士の名前が列記されております。例えば冒頭には左のように記されております。

五月十九日巳ノ上刻頃参着

- 黒田誠三郎殿
- 黒川鐘之助殿
- 柏瀬 雅三殿
- 倉林愛之助殿
- 橋本 鉞蔵殿
- 竹内糸三郎殿
- 丹所 太平殿

同 廿一日辰上刻参着

- 式番参着 小林房之進殿
- 和久沢文四郎殿
- 根本国次郎殿
- 石井幸右衛門殿
- 植栗 莊蔵殿
- 山口徳五郎殿
- 石塚吉十郎殿

（以下略）

この記録を調べると、五月十九日から開始された「遠足」は、数日おきに七〜八名が一組になって安中城からスタートして、六月二十八日まで、なか十六日間にわたり合計九十八名がゴールしました。中に二人の武士が二回走りましたので、実数は九十六名となります。五月十九日といえば陽暦では七月二日、六月二十八日は八月十日ですから、まさに真夏日の中を走ったことになります。

右の記録の中で特徴的なことを挙げてみますと、

①最初の組である五月十九日の組には、右記のように、着順が書いてありません。それは安中城に呼ばれた曾根神官が、「遠足」の割付札五十枚をいただき、その帰路、坂本宿に泊り、翌十九日の朝、神社に帰ろうとして碓氷峠の羽根石山に差し掛かると、走ってきた武士たちに追い抜かれ、そのため着順が書けなかつたものと思われます。武士たちに追いつこうと懸命に走った神官の姿が偲ばれます。

②不思議なのは、五月二十二日と二十三日に走った組は、実は辰の中刻頃(午前九時頃)のゴールなのに、巳の上刻(十時半頃)にしてくれと頼まれて、神官が到着時刻をわざわざ一時間余も遅く、書き直していることです。これは一体何故でしょうか。閉ざされた狭い武士社会のことゆえ、他の組への配慮か、それとも上役への遠慮なのか、不可解なことであります。

③安中城から峠までの走行時間については、よく質問を受けますが、江戸時代の計時法が不定時法ですし、果たして時計には何を用いていたのか、定かではないので正確な走行時間が割り出せませんが、明六つ(卯の時、仮に今の六時)のスタートとして、一番早い五組が辰の上刻(今の八時〜八時半)、一番遅い組が巳の中刻(十時前後)にゴールしています。とすると、早い組が二時間半程、遅い組が約四時間ということになります。現在速いランナーは平均して二時間数分でゴールしています。

④さて、峠に着いた武士たちには、力餅・みのほし大根・きゅうりもみ・御神酒少々とひたら・お茶などが振る舞われました。ひと休みした彼らは個人或いは組ごとに、十疋から三十疋の金銭を「御初穂」として神社に奉納しました。この奉納した人数が合計百一名で、走者の九十八名と合致しません。上位の武士には「御供」が付いて走ったのではないか。昼飯を頂いて下山致しました。

英泉画・羽根石山と坂本宿↓

⑤ところで、遠足保存会では城内より峠までの距離を二九・一七kmとしていますから、それを往復した武士は随分疲れたと思われます。しかも往路



は、旧坂本宿まではだらだら登り、そこから山に入りますが、最初の羽根石山は「刃石山」ともい

「急峻な崖のような登り坂ですし、「座頭ころがし」と言う難所もあります。幾分平らな所には「羽根石茶屋」と「山中茶屋」という茶屋がありました。安中城が標高約一五〇m、熊野神社が約一二〇〇m、高低差一〇五〇mを武士たちは往復したのです。次に、この「遠足」が再現されるに至った経緯を述べてみます。

昭和三十年五月二十日、この古文書発見の記事が「日本最古のマラソン」として新聞に発表されるや、大変な反響を呼び、やがてドラマ作家の伊馬春部氏・NHKの湯浅辰馬氏や、郷土史家たちが碓氷峠を实地踏査しました。山ヒルに足を刺されて苦労したとのことです。その結果、伊馬春部氏脚色「安政奇聞まらそん侍」が、同年十一月五日午後八時五分からNHK第二放送から放送されました。

これがさらに反響を呼び、シナリオ作家八木隆一郎氏らも峠を見学、翌年の昭和三十一年二月五日、大映映画「まらそん侍」が封切されました。勝新太郎・嵯峨美智子・トニー谷らの出演で、一人の美女を巡って二人の若侍が競うという筋書きでした・・・。



さて、それからしばらくの時が流れ、忘れかけていた「遠足」でしたが、昭和五十年五月二六日、千葉市花見川団地の「走友会」の山野実氏ら五名が、横川関所から峠までを試走したのです。

この快挙に刺激されて、当時の安中・松井田両市町内に「遠足」再現の話が盛り上がり、ここに「安政遠足保存会」が設立されました。初代会長は郷土史家中澤多計治氏・理事長小林二三雄氏でした。遠足復活にかけた会長以下関係者の献身的な努力によって、遂に同年六月十五日明六つ(午前六時)スタートで、復活第一回の「安政遠足」が実行されました。

申込者百名。当日の参加者九十四名は、安中市長の叩く太鼓を合図に安中城本丸跡をスタート、大名小路から町口門、大手の坂を下り、旧中山道に出て、西へ西へと走り、横川の関所を通過、碓氷峠の熊野神社へと走りました。完走者七十名、一位が二時間十六分でした。熊野神社の社前で表彰式が挙行されました。

その後、今春の三十六回まで、役員は勿論、市の職員はじめ警察関係・医師会等々、多数の市民の献身的な協力のもと無事に継続して参りました。参加者も北は北海道、南は九州まで多地域にわたっています。

第三回（昭和五二年）を記念して関口コオ氏の切り絵も出来て大会に花を添えていただきました。切絵←第十四回（昭和六三年）には新たに「ミニ遠足」として小・中学生のコースも設定され、第十七回（平成三年）からは関所コースも開かれて、参加者は急増して参りました。関所コースは第二十五回からは関所坂本宿コースとなりました。



中でも第十五回大会（平成元年）には、安中藩主板倉勝明侯の御子孫板倉弘氏もご子息勝章氏と共に安中に来られ、開会式で「私の祖先が始めた遠足を益々盛んにしてください」とご挨拶されました。第三十一回の平成十七年四月には「第九回ふるさとイベント大賞（祭り・スポーツ部門）」を受賞いたしましたし、第三十二回の平成十八年三月には、安中市と松井田町が合併し、新生安中市記念大会ともなりました。

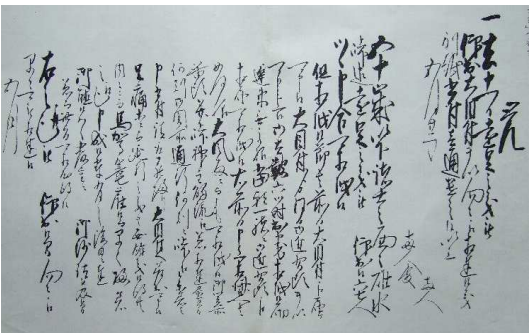
「安政遠足」は歴史の史実に根ざしていると冒頭に書きましたが、その後も古記録の発見がありました。

①昭和五十年には、板倉勝明侯が年寄（家老職）の斎藤衛守や御殿医三名を含む十名の家臣を従えて碓氷峠まで「遠馬」を行い、コースの下検分をした記録。

②その下検分のことを峠の曾根神官に知らせた坂本宿の名主の送った廻状。

③さらに貴重な発見としては、昭和六十年に「遠足」の規定書とも言うべき「覚」が、「案詞」という安中藩の御用部屋日誌から見つかったことです。「覚」↓

「覚」には、
イ五十歳以下諸士の面々に碓氷峠までの遠足の命令が出されたこと。



口参加者は六〜七人で申し合わせて、前日に御近習頭を通して大目付へ届け出ることを。

ハ当日の朝は明六つの太鼓の音で各自の家を出て、御近習頭に届けてから一緒に峠に向かって出発すること。

二届けたからには大風雨でも決行すること、関所の番頭や峠の神主に連絡してあるから、関所の通過時刻、峠の到着時間を書いた書付を受け取って帰り、大目付へ提出すること。

ホ足痛で遅着するのは致し方ないとして、途中で馬や籠を雇って来た者は、それがお殿様のお耳に入ったら殿罰に処するから、よくよく心得ておくこと。などが書いてあります。

ところで、名君と仰がれた板倉勝明侯はなぜ「遠足」を行ったのでしょうか。それは嘉永六年（一八五三）のペリー来航と関係があります。坂本龍馬が黒船の巨大さに驚愕、日本の危機を悟りました。俄然、攘夷論が湧き上がったように、当時の老中首座阿部正弘とは従弟同士、水戸藩主徳川斉昭とも親交のあった板倉勝明侯のことですから、国防の重要性を痛感していたと思われれます。二百七十年間の平穩に馴れ親しんだ家臣の気持を、「遠足」によつて振起させようと試みたのではないのでしょうか。

その後発見された古文書の中に、安政三年五月に「足並調練世話係九人を命じる」という記事がありますので、勝明侯は引き続き家臣の鍛練を試みていたと思われれます。しかし残念なことに、安政四年（一八五七）四月十日に四十七歳の生涯を閉じてしまいました。お墓は愛知県西尾市貝吹町の長円寺にあります。

さて、この「遠足」は安政二年（一八五五）に実施されました。私たちは、これを日本最古のマラソンと言っておりますが、第一回近代オリンピックがアテネで開催されたのが一八九六年ですから、「遠足」より四十一年後、また日本のオリンピック参加は一九二二年のパリ大会ですから、五十七年後のことになります。紀元前の古代ギリシャのオリンピックはさて置き、紀元後に於いては、この「遠足」が、日本どころか、世界最古初のマラソンではないかと、私は秘かに胸をときめかしているのであります。

完